

一般助成 子どもの健やかな成長を願う事業(つながり・かかわり)

「ビデオレターで結ぶ心の架け橋」事業

ビデオレター交換や絵画造形ワークショップを通じた ラオスの子どもと日本の子どもの国際交流

次世代を担う子どもたちにとって必要なことは、国や民族、宗教や文化の違いを超えて、相互に理解し合える国際感覚を身に付けることである。外交関係樹立から60周年を迎えたラオスの子どもとさいたま市の子どもが、芸術活動やビデオレターの交換を通して友好と相互理解を深める試みに取り組んだ。



日本とラオスの子どもたちがワークショップで描いた絵(左が日本、右がラオス)

ラオスのパクサン市に暮らす子どもたちと さいたま市の小学生がビデオレターで交流

「ビデオレターで結ぶ心の架け橋実行委員会」では、ミャンマーやネパールなど発展途上国に暮らす子どもたちの様子や、そこで支援活動をしている日本人の姿を取材編集したDVDを日本の子どもたちに見てもらう活動などを続けてきた。2016年度は日本と海外の子どもたちの国際交流を深めることを目的に、本格的なビデオレターを制作することにしたが、その事業費用としてAJOSCの助成が役立てられた。

国際交流の相手先には、外交関係樹立60周年を迎え、政府・民間あげて交流促進が進められていたラオスが選ばれた。現地で長く活動をしている「NPO法人ラオス

のこども」の野口朝夫事務局長のアドバイスにより、ラオス側の交流相手としては、首都ビエンチャンの南東150km、パクサン市に日本の協力で作られた「パクサンこども文化センター」に集う子どもたち約70名(小学生中心、一部中学生)と決まり、一方の日本側は、ラオスの首都ビエンチャンと友好関係にあり、文化交流や生活支援などに取り組んでいるさいたま市の「上小小学校」の児童(3年生)約80名が選ばれた。

「今回の交流事業では、NPO法人ラオスのこどもビエンチャン事務所、ラオス日本大使館、国際協力機構(JICA)ラオス事務所、べんてる株式会社、埼玉県遊技業協同組合などのほか、女優の仁科亜季子さんにもご協力いただきました」と、実行委員会の笠井澄子さんは語る。

ワークショップや学校生活の様子を収めた ビデオレターを作成してお互いに鑑賞する

具体的な交流は次のように進められた。まず、実行委員会のメンバーが2016年5月にパクサンこども文化センターを訪れ、下見を兼ねた打ち合わせを行い、併せて現地環境や子どもたちの様子をビデオ取材した。6月には上小小学校で子どもたちにラオスのビデオを見せるとともに、「NPO法人市民の芸術活動推進委員会」理事長の鈴木弘之さんの指導のもと、『墨絵で描くさいたまの町と自然』というワークショップを行い、その模様や学校での授業の様子、ラオスの子どもたちへのメッセージなどを撮影し、日本からのビデオレターを作成した。

7月には、そのビデオレターを持って再びパクサンこども文化センターを訪問。ラオスの子どもたちに視聴してもら

とともに、鈴木さんの指導のもと、1週間かけて『パクサンの町』をテーマにしたワークショップを行った。このワークショップでは、木の枝を集めて動物を作ったり、クレヨンで思い思いに絵を描いたり、大きな長い紙にみんなでパクサンの町を描いたり、さらに溶いた赤土を塗った段ボールに絵を描くなどが行われた。その模様と、センターで学んだり遊んだりしている子どもたちの様子、その家庭、子どもたちのメッセージなどを撮影し、ラオスからのビデオレターを作成した。

最後に、12月に上小小学校の授業参観において、ラオスで撮影したビデオレターの鑑賞会、ラオスの子どもたちが描いた大きな絵の展示が行われ、大勢の父兄も熱心に見入っていた。当日の様子はビデオに収録され、2017年4~5月ごろに予定されているラオス訪問で見てもらおうにしている。



日本で行われたワークショップ



ラオスの子どもたちから日本の子どもたちへのビデオメッセージ

助成団体: ビデオレターで結ぶ心の架け橋実行委員会



子どもたちの積極性や多くの方々の協力で充実した活動に

どこの国の子どもであれ、やはり子どもは素直で純粋な存在だということを改めて認識するいい機会となりました。言葉は通じなくても、こうして交流することが、本当の意味での相互理解につながる実感できました。また、ビデオレターという映像+音声を持つ伝達力にも感心しました。今後も同様の活動を続けていきたいと思えます。

ビデオレターで結ぶ心の架け橋実行委員会
笠井澄子さん